

## 「人間再興のとき」

キャレルの人間研究とヤング社  
世界アレクシー・キャレル友の会アジア代表会員  
ヤング株式会社社長 富士村 寿

### <自己紹介>

昭和 26 年（1951 年）に会社設立し、以来 54 年間、有益菌・酵母菌培養濃縮液（製法特許）1 品だけを製造して今日に至りました。その間広告宣伝を嫌い、販売エージェントを持たず、セールスマンを置かず、愛用者個人から自然に製品の価値が伝わり、この健康理論に共鳴していただけるかたに応答することだけを事業としてまいりました。会社設立のときは私が 20 歳の最年少者であり、現在は 74 歳の最年長者となりました。この会社が出来ます前に父の研究時代、その前に祖父の研究時代がありましたが、医師であった祖父は、エールリッヒとメチニコフによる液性免疫と細胞性免疫の 10 数年論争に結着がついて、1908 年免疫に関するノーベル生理・医学賞をこのお 2 人が受賞した頃から、特にメチニコフの乳酸菌療法を日本で製品化したいと考え、ブルガリアから約 90 種の有益菌を持ち帰り、おそらく日本で初めてのヨーグルトを作っておりました。この頃、赤痢菌の発見者 志賀潔先生とも親交があり、祖父の菌で志賀先生がご自宅のコタツの中でヨーグルトを作っておられたことを、後にそのお子さまからお聞きしました。祖父のヨーグルトを 2 つの面から改良した父の研究は菌数を増やし、培地を豆乳にしたことで画期的なものですが、最後にある達人から重要なヒントをいただいたことで昭和 23 年に完成し、昭和 26 年を待って今日の私の事業となったわけです。

製品ができましたすぐ、慶応大学の梅沢純夫先生のところへ持ち込み、殺菌試験をしていただき、それで良好の結果を得たため、梅沢先生から佐々木正五先生の確認をお願いし、その上 日本大学の寺田文治郎先生により分析試験等をしていただき、アミノ酸 8 種を検出、さらに寺田先生はアセテルコリンに対する結抗作用、ニコチン解毒に対する有効な結果を出していただき、初期の研究を得ました。時に昭和 26 年 11 月のことです。

## <キャレルとの出会い>

会社創立をしましてからしばらく後、リーダースダイジェストの特集版の巻頭にキャレルの「人間この未知なるもの」の抜粋が載っておりました。その最初の言葉に私は引き込まれてしまいました。そこには「人間は誰でもその風采・態度・容貌に特徴を持っている。人の外観を見れば、肉体と精神の特質、あるいは能力がわかる。」とありました。ほぼ40年ほど前になりましたか。その後、渡部昇一先生の名著「人間この未知なるもの」に出逢うこととなり、あらためてその真価に傾倒することになります。

当時の私の健康理論は、健康はたった一つの条件で成り立つものではなく、少なくとも整体・栄養・生活・精神の4面が均等に支え合うものであると考え、これを健康の基本原理としておりましたが、キャレルは人間の構成を物理・化学・生理・心理と表現され、考えてみると整体は物理、栄養は化学、生活は生理、精神は心理のことを言っているのではないかとその基本原理に驚いた次第です。

手を尽くして調べたところ、キャレルの秘書をしておられたボワシエ夫人が、フランス・リヨンの本部におられることを知り、矢もたてもたまらず、いきなりアポもとらずリヨンに出掛けたのは20年程前の秋でありました。幸運なことに、世界アレクシー・キャレル友の会本部の庭で芝生の手入れをしておられるボワシエ夫人—当時会の副会長にお会い出来たのです。私はそこでキャレルを心から尊敬する気持ちを縷々述べ、ボワシエ夫人のテストも受け、信任をいただいて会員として登録頂きました。(バリウーの丘の銅像のこと。ヤングの工場におけるキャレル立像の制作。会長の工場ご見学のこと。ビセトリノレ教授による彫像を頂戴したこと。拙著に序文をいただいたことなど。)

## <健康人間の主張>

私がかねてより、病人の研究に熱心である前に、健康人の研究にもっと力を注ぐ必要があるのではないかと、考えておりました。たとえば0-157に罹った感染者よりも、そのとき同じものを食したのに0-157に感染しなかった集団(このほうが多い)のはなぜか、ということ調べることによってはじめて、0-157の究明がなされるのではないかと考えておりました。

たとえば、テレビ番組などで、「きょうの健康」とあっても、結局は“きょうの病気”のことでしかありません。同じように「健康診断」も病気があるかないかを見つけるための“病気診断”であり、また「健康保険」も“病気保険”にほかなりません。

人間は病気か健康かを区別し過ぎながら、実はそれを真に区別することができないでいます。そして病気を克服した価値を過大評価しすぎ、健康を維持している価値を過小評価し過ぎています。

私は自分の仕事柄、ひとに健康維持を勧めながら、自分が病気をすることがあるとは思わないと考え、我が身を“動物実験”のつもりで薬も使わず、ご批判を受けるかもしれませんが健康診断も受けず、すくなくとも60年間、無病のまま今日を過ごしておりますが、そのことを著書にし、「無病の快挙」と題して朝日新聞社からこのたび出版いたしました。

### <私の信念>

1. 「健康は生命よりも大切である」と、まず言いたいと思います。

現代医学はこれから生命の延長—不自然すぎる延長—については、成功すると思われませんが、ただ生きているだけでは生命の価値はない、と私は思います。寿命はその人の天与のものでしょうが生きている限り正常な健康生活ができれば、生命の価値はほとんどありません。

2. 「経済一辺倒が不健康の主因である」と言いたいと思います。

上から下まで儲けることしか考えていない時代となりました。その考えが不健康を助長し、人間性を失わせ、社会破綻の主な原因となっていることを知るべきです。

3. 「“適度”こそが人間の指標である」と考えます。

多ければ多いほどいいという考え方は誤りです。こうした考え方によって人間は物質的にも精神的にも“健康の消化不良”を起こすことで、日々退歩しつつあると考えます。

4. 「生体の基点は腸にある」ということが忘れられています。

最重要な免疫の中核は、腸と腸内菌叢の健全な状態にあることは言うまでもありません。腸に他の菌（異物）を与えることなどよりも、自分個有の菌叢を育て、正常に維持することによって免疫力ははじめて発揮されます。

このことは、土壌や食事や生活全般を歪めている合成化学物質の解毒や廃除という、いちばん難しく、しかも緊急にやらなければならない健康活動の第一歩であり、しかも最後の方法であると私は考えます。